

使徒の働き16章1-10節 「予定変更の宣教」

1A テモテの同行 1-5

1B 兄弟たちの評判 1-2

2B ユダヤ人への配慮 3-5

2A マケドニア人の訴え 6-10

1B 禁じる御霊 6-8

2B 神の召しの確信 9-10

本文

使徒の働き 16 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、使徒の働き 15 章まで来ました。今朝は、16 章の前半部分、1 節から 10 節までを読んでいきたいと思っています。私たちは今、パウロの宣教旅行の第二回目の部分に入っていきます。前回のことを思い出してください。「15:36 さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」とパウロはバルナバを誘いました。けれども、助手について激しい議論になりました。マルコをバルナバが助手として連れて行くといったのです。パウロは、パンフィリアで一行から離れていった者を連れて行くことはできないと判断しましたが、バルナバは、マルコが自分の従兄弟であるし、彼に再度の機会を与えなかったのだと思います。けれども意見の対立が起こって、バルナバはマルコを連れてキプロスに行きます。キプロスは第一回目の宣教旅行で初めに足を踏み入れた島です。

パウロは、エルサレムから来た指導者シラスを連れて、「15:41 シリアおよびキリキアを通り、諸教会をカづけた。」とあります。ついに、第二次宣教旅行の始まりです。ぜひ、聖書地図を見ながら宣教の旅の道筋を辿ってみてください。第一回目の時は、ピシディアのアンティオキアに行き、それからイコニオン、リステラ、デルベへと向かいました。デルベから東に行けば、キリキア地方に入り、そしてさらに東に行けばシリア地方に行きます。けれども、信じた兄弟たちをカづけるために、デルベからリステラ、イコニオン、アンティオキアへと戻って行きました。そして、船に乗ってシリアのアンティオキアに戻りました。今度は、パウロとシラスはそのまま西に動き、パウロの出身タルソのあるキリキア地方に行き、それからデルベ、リステラへと向かいます。

キリキア地方のタルソのところから、トルコ内陸のルカオニア地方に行くには、3000 呎級のタウロス山脈を渡らなければいけません。唯一、そこにある峠が、キリキアの峡門と呼ばれます。かつては、ギリシアのアレクサンドロス大王がペルシアと戦うための遠征に行く時に、反対方向にここを通り、「我ここを通れり」という碑文を残しています。パウロもそれを見たかもしれせん。温暖で湿度のある地中海の気候から、一気に 10 度以上下がる高地に入ります。カッパドキアの地方です。そ

これから西へずっと行くと、デルベに行きます。シリアのアンティオキアからデルベまで、今の車道を通れば450キロはある長い道です。

牧者チャック・スミスがよく言っていました、こんなに長い距離を主に徒歩で動いたのだから、祈る時間はたくさん持てたであろうし、主を思い巡らす時もたくさん与えられていたことだろう、ということです。今は、いろんな雑音のために見えなくなっている霊的な世界、また奇跡が、そういった主との交わりの中で与えられていたのではないか？ということです。そうなのかもしれません。

ところで、この第二次宣教旅行で、パウロは前もって計画していなかったことが二つ起こります。その一つは、その宣教地でこれからの宣教のための同労者が与えられることです。それがテモテです。そしてもう一つは、今のトルコ、小アジアを超えたヨーロッパへの宣教が始まることです。後で詳しく説明しますが、このことを持ってキリスト教の広がりが決定的になり、その後の世界の歴史を変えたといっても過言ではありません。けれども、パウロが前もって予定を立てたり、計画したことではありませんでした。私たちの神は、予定の変更を迫る方であることが分かります。

1A テモテの同行 1-5

1B 兄弟たちの評判 1-2

¹ それからパウロはデルベに、そしてリステラに行った。すると、そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ人女性の子で、父親はギリシア人であった。

デルベからリステラに入りました。リステラでは、以前、足なえの人を立たせたことによって、バルナバとパウロが神々に祀られようとしたところであり、その後、アンティオキアとイコニオンから来たユダヤ人の扇動によって、石打にあったところです。その時に、おそらくテモテが信仰を持ったのでしょう。「テモテ」というのはギリシア語の名前で、「神に賞賛された」という意味です。

テモテのことを今朝、この説教の中で語りつくすことはできないでしょう。聖書において存在感が大きい人です。テモテの書いた文書は聖書にはありませんから、それほど感じないかもしれませんが、パウロにとって、「信仰による、真のわが子テモテへ（Iテモ 1:2）」と、テモテへの第一の手紙の書き出しで言っています。パウロにとって、信仰へと導き、育て、養っていった存在です。そして彼は、パウロにとってかけがえのない同労者でした。パウロが宣教地を離れなければいけなかった時も、その場で働きを続けています。例えば、ベレアで迫害と危害がパウロに迫ったので、「17:14 シラスとテモテはベレアにとどまった。」とあります。また、パウロに代わってテモテがコリントの教会に遣わされました（Iコリ 4:17）。パウロが自分の手紙を書くにあたって、テモテの名も共同の執筆者として書いています。第二コリント、ピリピ、コロサイ、テサロニケの第一と第二、そしてピレモンです！ピリピ人への手紙では、「2:20 テモテのような私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、だれもいません。」と言っています。ここまでパウロの代わりにな

ることのできるような、能力のある宣教者であり、牧会者であったのですが、彼はまだ非常に若かったのです。それで、テモテへの手紙では、「I テモ 4:12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。」とパウロが励ましています。

テモテの個人的なこと、またパウロとの個人的な関係が分かるのは、テモテへの第二の手紙です。ここ本文では、「信者であるユダヤ人女性の子」であったとありますが、手紙では、「1:5 私はあなたのうちにある、偽りのない信仰を思い起こしています。その信仰は、最初あなたの祖母ロイスと母ユニケのうちに宿ったもので、それがあなたのうちにも宿っていると私は確信しています。」とあります。幼い時から母また祖母から聖書を教えられたことも書かれています(3:15)。幼い時からの信仰はとても強いですね。牧者チャック・スミスは、アルファベッドを覚えるのに、母は聖書を使ったと言っていました。それほど幼い時から聖書に親しみ、テモテのように純粋な信仰が養われたようです。ある知り合いの方は、病の中でその痛みがとても激しく、聖書も手にすることもできなかったことがあったそうです。その時に、両親がクリスチャンでしたから、幼い時から聖書に触れていて、覚えていたみことばを思い巡らしていたそうです。幼い時からの聖書教育の力です。

ところで、テモテの父親は、「ギリシア人であった」とあります。当時は父系社会ですから、母親と祖母のユダヤ人としてのつながりはあったのですが、父が社会的には、彼をギリシア人として育てたと考えられます。けれども、これは彼にとって利点として働きました。パウロは、二つの文化を良く知っている者で、それで福音宣教にその背景が用いられましたが、テモテの場合は、育ちがまさにギリシアとユダヤのどちらもあったのです。そのような二重の素性が、神の国において大いに用いられることになります。

² 彼は、リステラとイコニオンの兄弟たちの間で評判の良い人であった。

彼の名前は神に賞賛されていたという意味がありますが、人にも賞賛されていたようです。兄弟たちの間で賞賛されていたということは、その信仰において優れていたと言えるでしょう。使徒の働きには、評判の良い人々が出て来ていました。ステパノやピリポのような七人の執事、パウロに手を置いて祈ったアナニアがそうでした。また信者の間ではありませんが、ユダヤ人の間で評判の良い、コルネリウスもいました。神は、人一倍、敬虔な人々を用いられることが分かります。

2B ユダヤ人への配慮 3-5

³ パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。

15 章において、異邦人の信者に割礼を受けさせるべきであると教えた偽教師たちに真っ向から対峙して、一歩も譲らなかつたのがパウロです。けれども、ここではテモテに割礼を受けさせてい

ます。これはどういうことでしょうか？15章における決定は、異邦人の信者が律法の頸木を負わなくて済むようにするためのものであると同時に、ユダヤ人信者との一致の絆を確認するものでした。ユダヤ人が、異邦人と食事をする時に、血の入ったものであるとか、偶像に供えられた肉であるとか、信仰がそこまで強くなく、良心が痛む兄弟たちがいることを踏まえて、愛の配慮の中で、敢えて行わないでおくというものでした。ですから、ユダヤ人にとっても安心し、異邦人にも納得のいくものだったのです。

そのような思いから、パウロはテモテに割礼を受けさせたのです。救われるためのものではなく、ユダヤ人に宣教するためのものです。パウロたちは、まずユダヤ人の会堂に入ってそこで福音を語っていました。ユダヤ人は、「母親がユダヤ人なのに、この者は無割礼なのか？」ということで、福音のこと以外で心を悩ませたり、つまづかせたりすることは得策ではないと考えたのです。コリント人への第一の手紙で、パウロは詳しく説明しています。「9:19-20 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。」私たちは、パウロのように、愛という原則から、また福音のために、自分に与えられているキリスト者としての自由を用いて行きたいですね。

⁴ 彼らは町々を巡り、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を、守るべきものとして人々に伝えた。⁵ こうして諸教会は信仰を強められ、人数も日ごとに増えていった。

ここにも、パウロが決して、ユダヤ人を無視して、異邦人が救われればよいとしているのでは決していないことがよく分かります。その反対で、異邦人に信仰による救いが与えられている恵みを宣べ伝えていながら、異邦人とユダヤ人がキリストにあって一つになる、平和の絆で結ばれることを願っていたことがよく分かります。そのような一致と平和が確認されていったので、諸教会が信仰を強められ、人数も増えて行ったのです。多くのキリスト者が、正しいことを言うことが大事だとしますが、知識よりも愛がまさっているのです。その愛があるところに、人々が集まるのです。

2A マケドニア人の訴え 6-10

1B 禁じる御霊 6-8

⁶ それから彼らは、アジアのみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。⁷ こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった。⁸ それでミシアを通って、トロアスに下った。

パウロ、シラス、テモテなどの一行は、過去に建て上げた教会の兄弟たちを強めた働きを終えた後、他の新しい地域を開拓しようと動きました。ところが、二度に渡ってその方向を御霊ご自身に

よって遮られています。

初め、「アジア」でみことばを語ろうとしています。これは、ローマのアジア属州と呼ばれるところで、小アジアの西部です。エペソを始め、黙示録の七つの教会として出て来る町々は、このアジア属州の中にあります。リステラに行った後に、西に向かおうとしました。その向こうには、エペソというローマ有数の大都市があります。

けれども、「みことばを語ることを聖霊によって禁じられた」とあるのです。なぜ、みことばを語るのを聖霊が禁じられるのでしょうか？主は、彼らが、そして私たちが御言葉を語るのをよしとおられないのでしょうか？このようにして、分からないことが起こる時があります。主が命じられる時に、矛盾したことを語っておられると感じる時がありますね。アブラハムが、イサクによって子孫が与えられると約束されていたのに、イサクを全焼のいけにえとして献げなさいと命じられます。けれども、ここで、信仰で踏ん張らないといけません。「箴言 3:5 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。」

そして、戸が閉じられると、私たちが考えてしまうのは、「原因探し」です。「たぶん、アジアの人たちは、福音を語っても信じないのではないか？だから禁じられたのだ。」とかいう理屈です。人に何か否定的なことが起こると、必ずこうやって原因探しする人たちが出てきます。いいえ、パウロの一行は、第三次宣教旅行でここを訪れ、ここが新たな宣教の拠点となっていくことになります。原因探しをすることは、それこそみこころではありません。聖霊が禁じられたのは禁じられたのです。ただ、それだけです。

ところで、どのようにして聖霊が禁じられたのか？なのですが、シリアのアンティオケでそうであったように、預言によって聖霊が語られたのかもしれませんが。同行しているシラスは預言者なので、リステラにいる時に祈っていたら、聖霊がシラスを通して語られたという可能性もあります。

そして、「フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った」とありますが、ガラテヤ州のフリュギア地方です。フリュギア地方の西端には、コロサイの町があります。アジア属州のぎりぎりのところ。ミシア地方というアジアの北にあるところに近づきました。その先に、「ビティニア」地方があります。黒海に面する地方で、当時は、重要な交通の要衝地であり、栄えていました。ですから、パウロは人の多く住む、人と物の行き来の多い大きな町や地域を選んで動こうとしています。おそらくはエペソに向かって西に向かい、それができなかったのに北に動いたのです。

ところが、「イエスの御霊がそれを許されなかった。」のです。ここで、「ビティニアに進もうとした」という「進もうとした」は、本当に何度となく進もうとしていたというニュアンスがギリシア語にはあります。けれども、許されなかったのです。しかも、「イエスの御霊」がと言っています。聖霊が許され

なかったのですが、主イエスが直接的に介入されて、強い意志を持って聖霊を通して語られたのかもしれない。ここで、どのようにして許されなかったのかと言いますと、もしかしたら、パウロが病に罹ったとか、そういうことかもしれない。そうでなくとも、何度となく行こうとしても、どうしてもいけない状況が出来上がっていたとも考えられます。こういったことも、主がお用いになります。

そこで、彼らに残された道は北東しかありませんでした。西がだけで、北がだめだったので、北東のミシア地方を通るだけです。そうしたら、地中海のエーゲ海に面する、「トロアス」の町に到着したのです。ここは小アジアとヨーロッパを結ぶ重要な港町です。そしてトロイの戦いで有名なトロイから南に40^{キロ}のところにあります。私たちは、2018年4月にここを訪れました。今は、何もなし砂浜になっているところでしたが、わずかに港の遺跡が残っています。

ですから、パウロはこの後、どうすればよいか分からなくなったのではないかと思います。けれども、思い出してください。旧約時代には、イスラエルの民がエジプトから出ていったものはよいものの、周囲が山に囲まれて、その先は紅海しかなかったところで宿営するように命じられました。後ろからエジプト軍がやって来て、万事休すです。けれども、紅海が分かれて、それが神の大いなる救いとなりました。そして、使徒の働きでは、ペテロを思い出してください。彼がヤッファの皮なめしシモン家に泊まり、そこで、天から風呂敷が降りて来て、「屠って食べなさい」という幻を見て、それでようやく、異邦人への宣教への鍵が開かれたのです。神は、似たような方法で、つまり、「他の選択肢がない」という方法を使って、ご自分の計画を実行するために、新たな道をお見せになるのです。これまでの予定が大幅に変更される時、それはもしかしたら、神の新たなお働きの始まりなのかもしれません。

2B 神の召しの確信 9-10

⁹ その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願するのであった。

「その夜」に、幻が与えられます。パウロは、試練の時、追い詰められた時があり、その時に「夜」における語りかけがあります。これからヨーロッパへ宣教に向かいますが、迫害の連続で、逃げながらコリントにまで行きました。そこでもまた迫害です。「18:9 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけません。」と語られました。そしてコリントに大きな宣教の拠点、教会が出来ました。そして、エルサレムでユダヤ人たちが、パウロの証しを聞いて発狂しました。そして千人隊長によって引き出されて、何とか命を取り留めましたが、その時も夜でした。「23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならぬ」と言われた。」これを分岐点にして、パウロは無事にローマで福音を語るようになります。それで使徒の働きは終わります。

ですから、行き詰まった時に語られ、実はそれは主が新たな戸を開く、その励ましの語りかけなのです。ここでは、マケドニアという、今のギリシアの北部にあたるところにいる人が、「私たちに助けてください」と懇願するのです。

¹⁰ パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちに召しておられるのだと確信したからである。

ここで著者ルカは、「私たち」と言っています。注意してみると、これまでは「彼ら」と言っていました。つまり、ルカはここからパウロの一行の旅に加わったということです。

ここでは、「ただちに」という言葉が大事です。「確信したから」とありますが、この言葉は、「組み合わす」という意味合いがあるそうです。つまり、これまでの経緯を比較検討しながら、最終的にそのような結論が出た、ということです。アジアに行こうにも、禁じられた。ビティニアに行こうにも、許されなかった。それで、海の向こうの人が助けてくれと言っている。つまり、マケドニアの人たちに「福音を宣べ伝えるために、神が私たちに召しておられる」と確信したのです。

こうやって、私たちは導かれています。新たな神の御霊の働きがあります。主は、テモテを加えて与えられたように、人々を信仰の友に、同労者に加えてくださり、人と人のつながりで事を行われます。そして、時に妨げるもの、閉じられるものを前に置かれることによって、実はこちらの道に神が導いておられるのだということがあります。どうか、みなさん、主を追い求めてください。時に八方ふさがりのように見えて、落胆してしまうことがあるかもしれません。けれども、実はそれが主ご自身の導きそのものかもしれないのです。

